

共振共鳴力の用い方 心理療法としての愉気、浄霊法

藤原桂舟（鍼灸師・心理療法家）

要点

1 共振共鳴現象とは、セラピストとクライアントの心身がつながること。俗にいう「受ける」という現象はこの一つ。

シャーマンの心理療法や中医学などの伝統医療では、共振共鳴現象はよく起る。この場合、治療者は、意識的にこの状態をつくる力（共振共鳴力）を持っていることが多い。

また、この観点から見ると、治療＝クライアントとつながる、ということになり、治療後もつながりが残ることがある。これが「受ける」という状態である。

2 手から気を送る愉気法やシャーマンの心理療法である浄霊法は、共振共鳴力を用いた一種の心理療法であり、霊的ヒーリングとも呼べる面を持っている。これを行うと、クライアントの深層心理にある想いや枠組が浮かび上がってきて、感情の再体験などが起る。これは、深層心理学のセラピーで起ることと、ある程度、似ている。

3 共振共鳴力は、霊能者のような特殊な人だけの能力ではなくて、濃い薄いはある、すべての人々が持っているものである。愉気法などによって共振共鳴力を育てていくと、様々な「いのち」や山川草木のような自然ともつながる感覚を持つことができるようになる。

一 共振共鳴力とはなにか

筆者は鍼灸師でもあるので、クライアントに対して身体治療と心理療法とを行っている。

手法としては、主に野口整体、経絡治療、心理療法を用い、身体治療と心理療法をシームレスに行き来する形である。

そのような治療をしていて、あるとき、次のような現象が自分の心身に起ることに気づいた。

- クライアントの身体的なコリや頭痛、腹痛、動悸などの体の状態をセラピストが「受け」、セラピストも同じような処にコリや痛みを感じる。
- うつのクライアントの影響を「受け」て、セラピストも抑うつ気分になる。
- クライアントの怒りや悲しみなどの強い感情を「受け」て、セラピストの内部にも同じような感情が起ってくる。

このような「受ける」現象の本質は、ふたりの人間の間の心身の共振共鳴であると気づいたので、これを「共振共鳴現象」と呼ぶことにして長年観察し研究してきた。

その結果、いくつかの知見を得たので、ここに述べる。

また、「共振共鳴」という観点をつかむには、岡林龍之（アヒムサ会）の「アヒムサ健康法」や野口裕之（身体教育研究所）の「整体・内観法」などにたすけられた。

<仮説 1>治療とは、治療者とクライアントの心身がある程度、つながることになる行為である。だから、治療者はクライアントの様々な心身状況を受けやすい。

私自身の体験としては、上記の様な3つの出来事をはじめ、朝、自分で自分の体調を診たときは異常がなかったのに、肝経異常のクライアントとのセッションが終ったあとで調べてみると、自分も肝経異常になっていた、などということがよく起った。

さらに深い共振共鳴現象の一例をあげると、「ある結核の少女が、病院に入れられて亡くなる時、同じ時刻に先生（野口晴哉）も血を吐いた」 野口昭子「回想の野口晴哉」

ちくま文庫 p.63

野口整体の創始者である野口晴哉（はるちか）は、気を用いた整体で、心身両面にわたって多くの人々を治療した。これは、野口と彼が治療した少女との間の共振共鳴が治療後も続き、同じ時刻に喀血という身体反応が起ったということである。つまり、治療者が、クライアントの心身に共振したのである。

また、共振共鳴現象では不思議なことも、しばしば起る。

- クライアントが言おうとしている事、しようとしている動きが、セラピストに感じ取れる。いわゆるテレパシー的な現象。
参照 資料1
- クライアント自身が忘れてしまっている過去の記憶が、セラピストの心にふとインスピレーションとして浮かぶ。

このように、治療という行為は、ただでさえクライアントの想いに共振共鳴しやすいのに、心理療法では、治療者が相手を受入れようと受容共感のスタンスを取るため、更に共振共鳴しやすくなる。

また、逆にクライアントが強い想いを持っているとき、治療者がその想いに巻き込まれ

て、共振共鳴状態に入るということも多い。

つまりこの現象は、クライアントの想いの強さと治療者の繊細な感受性の二つの要因によって決まってくると思われる<仮説2>。

しかし、無防備にこの状態に入るのは、治療者にとっては、不安感や心身のアンバランスが生じるなどのリスクがある。

そこで、このような共振共鳴現象を感じているセラピストは、自身の護身ということに注意する必要がある。その方法としては、ワーク4の下丹田行気や、自分のエネルギーをアップさせる事の想起などを、このワークでは体験していただく。

<ワーク1 頸椎チェック>

自分の心身の異常を感知する方法。

<ワーク2 「受ける」体験>

ネガティブなことを被験者が思い出したり、イメージする。

その時、セラピストの身体感覚にどんな変化が起るか、頸椎チェックはどう変化するか。

<ワーク3 治療経絡の変化>

被験者の治療経絡を色ひもで調べておく。これは「筋診断法」という経絡治療で行う手順であり、例えば黒に反応すると、腎・膀胱経を治療経絡と診断する。

クライアントとロールプレイ（ある程度、真剣に）を行うと、治療者・クライアントともに経絡状況が変化する。

<ワーク4 護身のための下丹田行気>

二 霊的ヒーリングという心理療法

また、この共振共鳴現象は、いわゆる霊能者の霊言、透視といったことも説明できるよ

うに思われるので、そのことを次に述べる。

クライアントの過去のことを言い当てる、死者の霊と話をするなどの現象は、一般には霊能力によるものと理解されているが、共振共鳴力という観点からみると、次のようになる。

クライアントの過去のことを当てる ⇒ セラピストが、クライアントの潜在意識に共振した。

ユタやイタコが霊と話をする ⇒ セラピストがやはり、クライアントの潜在意識に共振した現象。

共振共鳴力という観点からは、このような説明となる。

またあとで気を送るワークをみんなで行うが、この共振共鳴力は、特殊な人だけのものではなく、濃淡はあれ、筆者の経験ではほとんどの人にあるものと思われる。

共振共鳴力をもちいた心理療法は、シャーマンの心理療法として、昔から行われてきたと思われるが、ここでは「霊的ヒーリング」ということばで呼び、いくつかのケースを提示して考えてみたい。

ケース1 松原皎月（こうげつ）「心霊治療」133 ページ 1930

以下は筆者が原文を現代仮名遣いに改めた。

松原の浄霊法は、現れた霊と話し合って説得するという形だが、これは他の術者もよく用いた基本的な浄霊法のひとつである。

昨年5月のことではありますが、当市内の某雑貨店の主人公が来会して曰く、半年ほど前から左足の自由を欠き、日常の起居進退に困

難するので、たくさんの医師にもかかったが、神経痛というような病名のもとに種々手当してもらったが、一向にはかばかしく行かず、ことに近來はだんだんと背中の方へもひろがってきて脊髄に異常を感じるようになってきたと言うのです。

私は一見して普通の病人と異なることを感じましたから、前記の如く後頭部、眉間、のど、水月、丹田という順序に2, 3分間あて霊気を放射してゆきましたが、患者は大層よい気持ちで瞑目しているのです。はてなと思いつつ、最後は脊髄部に左右の手掌をあて霊気の注入をしているうちに、だんだんと患者は苦しそうな顔をし、はてはウーム、ウームとうめいて、たらたらと汗さえ流していましたが、その日はそのままですんでしまったのです。また明日一回施術しましたが、前日と同様ウーム、ウームと苦しみだしたが、一向はかばかしくないので、思い切って暗示法を加用しました。

「さあ胸や腹の中にこみあげてきていることをすっかり話して下さい。そうしたら苦しさはすっかりなくなるのです」と荘重な声で申し渡しました。事実いかにも胸に何ものかがこみ上げてくるかのごとく苦悶しているのです。ところがこの時突然患者はヨヨとばかりに泣き伏しましてボロボロ落涙しながら曰く「自分は――、この者の母親であるが、この子に対する執着が断ち切れないので実は半年前から宿っていたが、幸か不幸か貴下の霊術にかなわず残念ながらもはや離れます」と言うのです。

そこで私は、あなたは息子さんがかわいいので来ているのか知らんが、それは息子さんのために返って不為めであり、またあなた自身もいっそう、罪障を深める道理であるからすみやかに立ちのいてもらいたい、もちろん丁寧に冥福を祈るからと懇々と諭して脱霊せしめたのであります。

ところが術がすんでから帰宅すべく杖をとって一步外に出ましたが、突然頓狂な声を出して引き返ってきて「やあ先生、不思議です、足が治りました」と全く飛び上がらんばかりに喜ばれたのであります。

次に、筆者自身の体験を述べる。

今から二十年以上も前、その当時の筆者は、浄霊法やお祓い、加持祈祷など、様々な霊的技法を探究しており、各地の霊能者や修験者をよく訪ね歩いていた。そうして研究と実践の二面を磨いていた。その頃の浄霊法の体験を二つ、述べる。

ケース 2 オキナワ

まだ研究を始めて数年で、知識ばかりが多かった頃、沖縄で、ある教団の幹部の方々を対象に、浄霊法の講習をしたことがあった。

希望者に実際に行ってみるというデモンストラーションの段になり、ある男性が手を上げた。

その男性に、法式どおり定められた手順で浄霊法を行っていき、九字を切ったところ、突然その男性が苦しそうな呻き声をだし、広間の畳の上を泳ぐような動作でころがり始めたのである。

しばらくそれは続いたが、その憑霊現象がおさまった後、本人に、「何が起ったのですか」と尋ねると、「小さい頃、海で溺れ死んだ弟が出てきて、成仏していきました」と言われた。

その当時の筆者は、知識はあったが経験はまだまだあさく、そんなに激しい憑霊現象に出会ったのは初めてだったので、こんなこともあるのかとひどく驚いた。と同時に本当にあるんだということがわかり、深い感銘を受けた。

ケース 3 奈良・生駒

それから数年後のこと。ある人に乞われて、

筆者は奈良の生駒で、古い旅館をお祓いする浄霊法を修した。

泊まり客から、幽霊が見えたとか、何かが出る、などということをちょくちょく言われていたらしく、施主からは、旅館をたたんでビルを立てる計画なのだが、その前にお祓いをして欲しいという依頼だった。

母屋の奥のふろ場の前の広間に祭壇を設け、筆者は浄霊の祈祷法を行った。

閉じられている雨戸が多かったため、かなり薄暗い中での修法だったのだが、修法中、後ろのほうで、ガタガタ、ガタガタという音が何度か聞えた。

なんだろうかと不審に思うのだが、修法中なので、後ろを振り返るわけにはいかない。

すべての修法が終わった後で、集まった関係者の方々と会食がはじまった。すると、数人の人が

「いやー、今日の法要はとてもよかった。やっぱりなにか憑いとったんやな」

「雨戸がガタガタ、いうとったもん。悪い霊が窓から出て行ったんや」

「ようけ、憑いとったんやな」

この話で、異常に盛り上がっているのである。若いのにたいしたもんやとえらく持ち上げられたが、それより筆者は、内心、考え込んでいた。

浄霊法をして、そんな体験は今までなかったからである。

「気分がはれた」、「頭痛が治った」、「体調が良くなった」などということはよく言われたし、沖縄のような憑霊現象の経験も、この頃にはかなりあった。

しかし、ガタガタは初めてだった。

このことは筆者の心にひっかかり、かなり考えたが当時はよくわからず、結局、不思議だんで終わってしまった。

この二つの体験は、筆者にとっての言わば

イニシャルケースなのだが、ここから次のような疑問をずっと考えさせられることになったのである。

- 憑霊現象とは何なのか？
- 同じような作法で行っているにも関わらず、ケース2と3のように発現する現象に大きな隔たりがあるのはなぜか。
- こちらの思ってもいないことが、しばしば起ってくるのはなぜか。

それ以降、試行錯誤をしながらずっと考えてきたが、この問いに対する筆者の現在の考えは次のとおりである。

A この3つのケースは、どれもクライアントの深層意識に働きかけている。手法は、気を送ることやそれに基づく儀式が中心である。つまり昔の霊的ヒーリングは、深層意識に働きかける心理療法といえるのではないか。

B 霊的ヒーリングを行うと、クライアントの深層心理にある想いや枠組が浮かび上がってくる。また、感情の再体験も起る。これは、深層心理学のセラピーで起ることと、ある程度、似ている。

C 霊的ヒーリングの根本は、セラピストの共振共鳴力である。クライアントの深層意識にひそむ「ある想い」を浮かび上がらせる共鳴共振力こそが、この霊的技法のかなめである。

松原の場合は、暗示法も用いているが、術の中心は、霊気を放射するという霊的ヒーリングである。

現代の心理療法は、主としてクライアントとの対話を用いて進んで行くが、霊的ヒーリングでは、言葉を用いなくても、治療者の共

振共鳴力でもってクライアントの深層意識に働きかけるのである。

D そうして、クライアントの深層意識にある想い・枠組に沿ったかたちで、現象が起ってくる。

つまり、オキナワの場合は、クライアントが、溺死した弟に対して何らかの想いを抱いており、本当の成仏は別な形で起ると深層意識で感じていた。だから、そのように現象が発現した、一種の憑依現象として。

奈良の場合は、建物に憑いている悪霊の浄霊はこんな形で起ると、参加者が考えていた。だから、そういう形で実現した。

松原のケースも、雑貨店の主人が自分の母親の死去に対して何らかの割り切れぬ想いを抱いていた。だから、母親の霊が自分に憑くという形で現象が起り、結果的に母親の成仏が自分（主人）の腑に落ちた現象として肚に入ったという結末になったのである。

しかし、オキナワは心理現象であるが、奈良は、実際に雨戸が鳴ったのだから、物理現象ではないか？

そう反論される方もいるだろう。

そのとおり、筆者は、いまは次のように考えている。

E ひとの想いや感情は一種のエネルギーであり、そのエネルギーは、

- ① 心理的・物理的影響を引き起こす
- ② その「想いエネルギー」は、ひとを共振共鳴させる（これが共振共鳴現象である）。

最後に、野口晴哉の弟子である犬塚が、整体操法という指導を受けたときの記録を取り上げてみよう。

ケース4 犬塚光男「晴哉先生のご指導」 月刊全生 2007年11月号 19ページ

仰向けになり、先生は右手の3本の指を腹部第三（筆者注 腹部第三とはへそ下の丹田のこと）の左に当て、右に寄せてから腕頭骨で第三の右を押さえて、第三の上に掌がきて、そのまま真下に押さえられました。この一カ所で全身を包み込まれたような感じです。このまま先生が少しでも動かれますとその通りに私の体が動いてしまいます。

そして全身をピタッと押さえられた感じを味わっていると――（略）――私の体中に気が満ちて、自分が大きくなったような気持ちです。

ところが、自分が体以上に大きく膨らんでいく感じがして、自分が阪神地区道場の指導室いっぱい大きさになった感じがしました。

どうなってしまうのだろうとっていると、ついに私は道場の屋根の上において、目を閉じているはずなのに西宮の街が見えています。「このままではやばい、どうしよう」と思った途端に自分の体になりました。

大変不思議な感じでしたが、これが完全に自由になったということなのかなと思っています。

いかがだろうか。

これが他のケースと同様の霊的ヒーリングだとおわかりいただけるだろうか。

なにも言葉は用いていないが、野口の共振共鳴力で、犬塚が超常的な体験を味わった。

何か霊が憑いていた訳ではないが、犬塚の深層意識にあった「完全な自由」への何らかの想いが、野口の共振共鳴力によって浮かび上がってきたのである。

言葉を用いずとも、クライアントとセラピストがともに共振共鳴状態に入っていけば、

クライアントの深層意識の何らかの想いが浮かび上がってくる。

これが、昔からのシャーマンの心理療法（霊的ヒーリング）のひとつのパターンである。

三 気を送るということ

霊的ヒーリングの実習として、気を送ることをみんなで試してみる。

気を送るということは、誰にでも出来るものであるが、その人の考え方により、効果が変わってくるものでもある。

- 気を送る＝自分のパワーを送るという設定をしている人 ⇒ 何人も行くと、疲れてくる。
- 気を送る＝相手とつながるという設定の人 ⇒ 相手に共振しやすい。その結果、共感しやすい。

共振共鳴力は、私と他人、私と自然、私と宇宙、私と大いなるものとのつながり感を深めてくれる。

そのことを、愉気をとおして体験してみたい。

<ワーク5 気を送る>

粒と波という2つのパターンで、パートナーに気を送ってみる。

- エネルギーの粒々が、自分の手から相手に送られていく。
- 手を触れて、イメージで相手と一体になる。

<ワーク6 自分の心身状態を相手に共振させる>

相手の側に立ち、その人のことは全く考えず、自分が深い意識状態（瞑想状態やハーモニー状態）に入っていく。

うまくできれば、相手も深いリラックス状態に自然に入っていく。

四 まとめ

最も重要なことは、この共振共鳴力は、霊能者のような特殊な人だけの能力ではなくて、すべての人々が持っているものだということである。

なぜならば、このようなワークをすると、ほとんどの人が、いつもよりずっと深く、人と人とのつながり感を感じられるのだから。

そうして、このつながり感覚を深めていくと、人とつながるだけではなく、動物や植物とつながる、山や川、星などの自然とつながる、宇宙とつながる――、などといった感覚が育ってくる。

そうして、その人の生きるということに対する考えが自然と変わってくるのである。

こういった技法の本来の目的は、そこにこそあり、それは生き方についての心理療法といえるのではなかろうか。

資料1 多田 宏 (合気道9段 イタリア合気会創立者 植芝盛平、中村天風に師事)

合気道の達人である多田宏は、こういった現象をテレパシー訓練ということばで、次のように述べている。

(<http://www.asahi-net.or.jp/~yp7h-td/busintai.html>)

多田：テレパシーの練習は時間をかけて真剣に研究していかないと。イタリア合気会でもそうとうに行っていて居ります。その為毎年1週間、呼吸法と、安定打坐（筆者注 中村天風がつくった瞑想法）とテレパシーの基礎練習

を組んだ講習会も行っております。イタリア合気会で、最初にこの種の稽古を行ったのは、私がイタリアへ行って4年目の、ヴェネツィアで行った夏の合気道講習会からです。その時にはじめて、「考えるのではなくて、感じる」稽古をした。考えることと、感じとることの違いというのは、分かるようで、なかなか分からない。

イタリア合気会の道場では、その年から、この種の稽古を続けています。

テレパシーの練習といっても、いきなり人の考えている事が分かるわけではありません。むしろ互いの五感覚の延長、拡大、同化と言ってもよく、特殊な呼吸合わせというものです。

この稽古が合気道の技に与える影響は、それは想像以上に良いです。動き全体の感じが滑らかになり、調和するようになるんです。良く仕事等がうまく進行した時のことを「呼吸が合う」、と言いますが、その感じが体にも表れて、第三者にもわかる様になります。

筆者プロフィール

鍼灸院すばるα 院長

<http://subaru-alpha.com/>